

孤高のCEOと子作りすることになりました！

「うっわー。オシャレすぎい……」

地上から高層ビルを見上げ、桐ヶ崎茜音は感嘆の声を上げた。

てっぺんにある“Souffly”のカラフルなロゴが、春の日差しを受けてきらめく。Soufflyは多方面にビジネスを展開する、巨大企業グループだ。元々はECサイトを中心とするインターネットサービス会社だったが、今や日本でこの名を知らない人はいないだろう。

世田谷区の豪徳寺にほど近い一等地。ずどんと一棟まるまる自社オフィス。ため息が出るほど洒落たビルの中、全面ガラス張りのエントランスをさっそうと歩く若手社員の姿が見えた。

緊張が高まり、茜音は首に巻いたワインレッドのスカーフを直す。プライベートな用件だからこそ、女性らしいタイトスカートに上品なニットを選び、ロングヘアをふんわり巻いて、抜け感が出るよう意識した。

フラットパンプスのかかとを鳴らし、エントランスをくぐり抜ける。まっすぐレセプションに向かい、名刺を渡して来訪を告げると、奥にあるVIP専用らしきエレベーターに案内された。

書類にはつぶさに目をおとし、準備は万全だ。なにが大変って書類をそろえるのが大変だっ

た。履歴書や職務経歴書のみならず、住民票や健康診断書、さらに大学の卒業証明書や資格認定証などの添付書類を含めると膨大な数だ。先方とそれだけの量を交換し、偽りがなければ一項目ずつチェックし、すべて裏を取った。

あのことは大丈夫かな？ もしバレたら、問題になりそうだけど……

しかし、計画を実行するにあたり、重要ではないはずだ。露見すれば先方は眉をひそめるだろうけど、聞かれなければ答える必要はない。誰にだって人に言えない秘密の一つや二つ、あるだろうし。うしろめたさがまったくないと言えは、嘘になるけど。

エレベーターは最上階に到着し、秘書と名乗る男性に案内され、通路の奥にある応接室に足を踏み入れる。

その瞬間、鼻孔を掠める、かすかなフレグランス。先に入った男性がつけたものらしい。エネルギーな大都会をほうふつさせる、男らしくて清潔感のある香りだ。

いい香りだな、と称賛するとともに、密かに胸がじりりと疼く心地がした。

そこで茜音は、初めて先方と対面することになる。

菱橋龍之介の第一印象は、すぐく頭のキレイそうな美貌の紳士、というものだった。

茜音より五歳年上の三十四歳。薄いフレームのメガネが無機質な印象だけど、かなり整った顔立ちをしている。男性にしては肌のキメが細かく、痩せているせいか頬骨から顎のラインがシャープだ。長めの黒髪をうしろへきっちり撫でつけ、額に二、三本落ちた毛束の筋が、絶妙な色気をもみ出していた。

「はじめまして、桐ヶ崎さん。本日はようこそお越しくございました」

龍之介の声は低く、聞き惚れてしまう。

「お会いできて光栄です、菱橋社長。こちらこそ、お時間を頂きましてありがとうございます」

茜音はさっと営業スマイルを顔に貼りつけた。

すすめられたソファに座り、まずは雑談から入る。大分暖かくなりましたねとか、仕事はお忙しいですかとか、豪徳寺界隈はいいところですねとか、そういう話。

それから、本格的な質疑応答タイムになった。事前に目をとおした書類について、気になった点をお互い確認していく。

それにしても、あまりに見事すぎる経歴だね、これは……。まさに、エリート中のエリートつてやつか。

改めて履歴書を眺め、茜音はしみじみと感心する。親友の安藤朝美の紹介とはいえ、これほどの好条件は他になく、土下座してお願いしたいレベルだった。

履歴書にはこうある。法徳大学の商学部を卒業後、MS銀行に就職。法徳大学といえは、トップクラスの名門私立大学で、MS銀行は日本最大の総資産を誇るメガバンクだ。

退行後にSouffyジャパンを起業し、爆発的にユーザー数を伸ばして急成長。さらに戦略的なM&Aを次々に展開し、今や誰もが知る大企業となった。日本のIT長者の中でも、龍之介は長期的に業績を伸ばした経営者として、トップ3には入るだろう。

非の打ちどころがない、学歴と経歴。若くして日本屈指のIT企業のCEO。すらりとした長身

で、目を奪われるような美貌の持ち主。

すべてを兼ね備えたパーフェクトな男性が、いったいどうして……？

「いったいどうして、こんな奇妙な契約に乗ったのか……疑問に思っただけじゃないですか？」

龍之介は刺すような一瞥をくれ、先制してきた。

キツネっぽい吊り目……という表現は妥当なのか、目は冷たくて凛々しい印象だ。一重まぶたの目は細く、目尻は切れ込みが長い。時折見せる眼光の鋭さに、ひやっとさせられた。

「そうですね。菱橋さんほどのかたが……不自由しているとは思えないので、どうしてなのかわからない理由になりますね」

龍之介は答えず、「実は私も理由がずっと気になっているんです」と同じ質問を返してきた。

……ん？ あれ？ なんか今、はぐらかされた……？

少し不審に思う。理由を聞いたとたん、あからさまに答えを避けた。

龍之介は気をそらせるように言う。

「桐ヶ崎さんはまだお若いですし、とても美しいかたなので、わざわざ契約する必要があるのかなと。ボニーズスタイルの経営も順調じゃないですか」

とても美しいかた。

不覚にも、ドキッとした。お世辞で質問をうやむやにされたと、わかっているのに……

ボニーズスタイルとは、せんえつながら茜音が代表を務める下着通販会社だ。社員は五十名ほどと規模は小さく、おもに女性向けのランジェリーをネットで販売している。フォトスタシア、略し

てフォトスタという写真投稿SNSを駆使した宣伝と、一般女性をモデルとして起用した戦略が当たり、売り上げはそこそこ順調だ。

「会社のことはさておき、他は全然ダメですよ。社長と聞くだけで大概の男性は引きましますし、ランジェリーという女性向けの商売ゆえ、出会いも皆無ですから」

そう言うと、龍之介は薄く笑った。

「そうですね？ 私は引きませんけど。むしろ会社経営ができるぐらい、パワーのある女性は魅力的ですが」

そりゃ引かないでしょうね、と苦笑するしかない。龍之介からすれば、中小企業の経営者なんて歯牙にも掛けない存在だろうし。

「菱橋さんのような男性ばかりならいいんですけどね。出会いも時間もなくて……。三十を前に、急がなくなっちゃって焦っていたんです。安藤朝美とは幼なじみだったので、よく相談に乗ってもらっていました」

「なるほどね。それで私に打診がきたというわけか。安藤夫妻と私は大学の同期で、私の人生観を熟知しているし、後継者問題をこぼしたら、あなたの話をしてくれて」

「私も菱橋さんの噂だけはうかがっておりました。ですが、そんな紹介に頼る必要、本当にあったんですか？」

「女性にはまったく不自由していません。それなりの地位と資産がありますので、向こうから寄ってくる状況です。自分で言うのもなんですが」

龍之介はきつぱり断言した。

うはー、自信満々に言い放つなあ……。他の男性なら失笑ものだけど、この人なら説得力がありすぎるんですが……

あきれれるをとおり越し、感心してしまう。自惚れも傲慢さもすべて、彼の堅固な魅力を引き立てていた。

「会社が大きくなるにつれ、後継者について考えるようになりました。経営は実力のある役員に譲るつもりですが、私個人が所有する資産は血を分けた人間に譲りたい。つまり、子供が欲しい。二十代の頃は考えもませんでした」

「そのお気持ち、よくわかります。心血を注いで築いたものだからこそ、肉親に譲りたいというか……」

龍之介は「そのとおりです」とうなずき、さらに言った。

「実は私、そもそも結婚するつもりがないんです。とてもじゃないが、赤の他人と生活をともにしたり、扶養する義務を負ったり、財産分与したりなんて不可能ですから。端的に言って、嫌なので」

しかめられた美貌には、ありありと嫌悪感があらわれている。過度の人間不信か、極度の人間嫌いか……この完全無欠な紳士の持つ、潔癖な一面が見て取れた。

「なら、婚前契約はどうですか？ あらかじめ財産分与や子供の養育費について、取り決めをしておくという」

そんなのとづくに検討済みですよとばかりに、龍之介はふつと鼻で笑う。

「もちろん知っていますが、一つとても重要なポイントがあります」

龍之介は背もたれに寄りかかり、サツと長い足を組んだ。大きな革靴はシンプルなレースアップ・シューズで、イギリスの老舗ブランドのものだ。滑らかな質感の黒革が、鈍い光沢を放っている。

ワイシャツの上に上品なシングルベストを着て、ソリッドなグレーのネクタイがよく似合っていた。肩幅は広く、ワイシャツの上からでも引き締まった体つきなのがわかる。

龍之介は、すつと人差し指を立てた。

「私がパートナーに求めるものはただ一つ。ピュアさです。しかも、完璧な」

「ピュアさ……？」

「少しでも下心のある女性はNGです。この下心というのがなかなか難しい。出会った瞬間は純粹でも、私の素性を知るとつれ、どうしても下心が湧いてしまう。ああ、この人と結婚すれば贅沢し放題で地位も名声も思いのままだと。そうになると、汚く見えてしまってもどうしても無理なんです……ハイエナのように」

「は、はあ……」

すこいことを言っている気がする。要するにお金持ちすぎてモテすぎて、ステータス狙いの女性ばかりなんだぜっていう自慢……？

リアクションに困ってしまう。たぶん、これが彼の本心なんだろう。そもそもこんな契約をする

時点で、少々変人であろうことは覚悟の上だし。

「純粋さかあ……」

内心ヒヤヒヤする。あのことを秘密にする自分は、きつと純粋さからは遠い。だますつもりはないし、だましたくもないけど、あのことはたやすく口にできなかつた。

勘の鋭い龍之介が、隠し事に気づきそうで……怖い。

「仕事も充実して地位もあり、資産が潤沢じゆんたくにある女性なら、少なくともステータス狙いではない。心理的なゆとりも期待できるでしょう？」

「それはそうですが……。けど、私だって菱橋さんのステータスに惹かれましたよ？ 素性すじょうを知らない男性より、菱橋さんのような優秀な男性がいいって思いましたし」

「当たり前のお話です。我々は恋愛をしているわけじゃない、優秀なDNAを探しているんですから。私も桐ヶ崎さんのことは徹底的にチェックさせて頂きました」

「結果、合格ってことですか？」

「ええ。桐ヶ崎さんとなら良好なパートナーシップを築き、目的を果たせると思いました。私のほうもお眼鏡にかなつた、ということですよ？

「はい。元々私は一人で成し遂げるつもりだったので、思わぬ協力者を得られて幸運でした。菱橋さんに助けて頂けるなら、子供に十分な教育環境を与えてやれますし……。この点、私も財産狙いみたいなものですけど」

「別に構いません。あなたのためじゃない、子供のためですから。お互いの考えが一致して、よ

かつた」

その場に、ホツとした空気が流れる。

警戒心は少し解け、この人とならうまくいくかもしれない、という気持ちが生まれた。

それから、いくつか法律的なことを話し合った。もう一度、お互いの意志を確認し、当初の予定どおり進めようと合意に至る。

龍之介はクリニックのパンフレットを取り出して言った。

「こちらが知り合いのクリニックで、我々のような事実婚カップルにも対応してくれます。この世界ではかなり名の知れた、優秀な医師ですよ。話ほどおしてありますので、遠慮なくアポを取ってください。懇切丁寧こんせつにカウンセリングもしてくれますから」

「はい。提供のほう、よろしくお願いします」

二人は立ち上がり、にこやかに握手を交わす。

龍之介の大きな手を握りながら、茜音は不意に直感した。

……この人、なにか隠し事をしてる？

なんの根拠も理由もない、本当にただの直感だ。たまにこういうことがある。相手が心の奥底に秘めている、微細な恐怖や不安のようなものを感じ取ってしまうのだ。

たしかに「後継者が欲しい」だけでは、理由として弱い気がした。後継者が欲しい人が皆、こういう契約を結んでいるわけじゃない。潔癖症けつぺくしやうもわかり。

彼をこの奇妙な契約へと向かわせた、なにか大きな動機があるはず。

隠し事はお互いさま、つてわけか……

去り際にお辞儀しながら思う。

ならば、彼のことをとやかかく言える立場じゃない。深掘りしないほうがいい。きびずを返す瞬間、龍之介の美しくも冷ややかな瞳が視界をよぎった。

◇ ◇ ◇

茜音はタクシーで帰ることにした。

普段は地下鉄やバスを使う。茜音は庶民派なのだ。年収がどれだけ上がったても、ライフスタイルはそれほど変わらないし、むだ遣いもしたくない。雨の日や疲れたときに、バスを待たずに少し楽をしたいぐらいで。

茜音のマンションはJRなかのえきまえ中野駅前にある。分譲ではなく賃貸だ。通常なら豪徳寺から三十分とかからない。しかし、環七通りかんななちろはいつものように渋滞し、のろのろ運転だった。

雨が降り出してきたらしい。灰色の雲が垂れ込み、ほこりっぽい街はけぶっていた。

車窓の景色を目に映していると、さまざまな思いがやってきては去っていく。

契約出産か……。まさか私がそんなことをするはめになるとはなあ……

子供の頃は、いつか大人になって当たり前のようにママになるんだと信じていた。電車がレールの上を走るように、特に努力しなくても誰もがそうなるものだ。

しかし、いざフタを開けてみたらどうだろう？ 妊娠出産はおろか結婚も、恋人を作ることすらまもなく、出会いさえ皆無かいむとは。

理由はいくらでも思いつく。けど、ランジェリー業界にしようが肩書きが社長だろうが、結婚して幸せな家庭を築いている人は山ほどいる。

神様がたまたまミスして、茜音一人だけ伴侶はんりよと出会える確率をゼロパーセントに設定したみたいだ。これまでの人生、不思議なくらい出会いがなさすぎた。

仕事ばかりしすぎたかな……。起業したての頃は忙しくて、合コンだの飲み会だの、かたっぱしから断ってたしなあ……

どうやら『仕事さえ真面目にしてりゃ、自然と幸せになれる』というのは、ただの迷信らしい。人生そんなに甘くなかった。やはり幸せは自分で探し、掴みにいかないとダメなんだ。

そう気づいたときにはもう、三十歳は目前だった。婚活アプリに登録し、婚活イベントに参加もした。けど、「社長」と名乗っただけで引かれたり目の色が変わったり、よい結果にはならなかった。富裕層向けにシフトしたら年齢層が急に上がり、結果はさんざん。

誰でもいいわけじゃない、年の離れたおじさんは遠慮したいし、ガツガツした男性は生理的に無理。なら、契約と割り切った相手のほうがマシとさえ思えた。

そうこうするうちに気づく。自分は結婚がしたいわけじゃない。子供が欲しいだけだ。

ポニーズスタイルに心血しんけつを注ぎ、築き上げたものを未来のために使いたい。二十代前半はやみく

もに仕事だけしてきたけど、三十歳を前にふと虚しさに囚われた。

ひたすら業績を上げ続け、どれだけ稼いだって、それがなんなんだろう？ 心の奥に巣食う、虚しい空洞はますます広がるばかり。ただ働くだけの生きかたを見つめ直し、真に大切なものを見極めなければ。自分自身のためだけに生きるには限界がある。

そんな折、安藤朝美に龍之介を紹介された。婚姻関係は結ばず、精子の提供だけ受けて茜音が出産し、養育費は二人で負担する、少しめずらしい取り決めがなされた。

だんだん、そういう時代になっていくのかなあ？ きつと、私だけが特別じゃないよね。皆、恋愛しなくなっていくって、その傾向はどんどん加速するのかもしれない……

かつて恋愛問題といえば、性格が合わない、浮気をされた、といったものが主流だった。けど、現代では恋ができない、恋する気持ちがわからない、恋なんて重要じゃない……という価値観が世を覆っているのが問題だと思う。

結果、多くの人が閉塞感を抱えて独身のまま、いたずらに年齢だけを重ねていく。

今回交わした契約の形は、今後増えていくかもしれない。下手したら、そういう形が主流になる日が訪れるかも。ある意味、茜音と龍之介は時代の先駆者かもしれないのだ。

と、自分に言い聞かせたところで、不安や迷いや罪悪感は消えない。

本当にこれでいいの？ 人として間違ったことをしていない？ なにかとんでもない過ちを犯していたらどうしよう……

子供の視点に立ったときはどうだろう？ 相思相愛じゃないカップルの間に生まれる子供は、不

幸だろうか？

気分は沈み、人知れずため息が出る。季節は三月の上旬。まだ春は遠く、肌寒い日が続いている。ちょうど黄昏どきで、対向車線はヘッドランプで埋め尽くされていた。

愛があればすべて許されるのか。逆に、愛がなければすべて許されないのか……？

はつきりした答えは、どこにもなさそうだ。

子供を愛せる自信があった。茜音自身、愛情いっぱい育てられてきたし、家族の愛しかたを知っている。龍之介の財力に頼らずとも、十分な養育環境を与えてやれる。子供が望めば惜しみなく教育投資もできる。

龍之介に子への愛情は期待していない。約束を守り、提供者となり、認知してもらえれば充分。充実した環境の下、茜音が愛情いっぱい育てれば、それでいいと思っているけど……

もちろん、愛し合う両親がいるに越したことはない。けど、そんな贅沢はできないのだ。愛と結婚とお金と健康、すべてのカードをそろえてから産んでくださいと言われても、できないことはない。

はあああ……。愛があってもお金がなかったり、お金があっても愛がなかったり、そういうことかなあ？ お父さんが言ってくれたことは、正しかったのかも。

父は白血病で亡くなった。先日、三回忌を終えたばかりだ。生来病弱だった父は生前、指を折りながらよくこう言った。

——人生ってやつはな、お金と健康と子供、この三つは同時に手に入らないんだ。そんな風に

できているんだよ。

なかなか当たっているとと思う。現に茜音はうなるほど資産があり、体もかなり丈夫なのに、恋愛運だけはさっぱりだ。金運と健康運にすべて使いきったらしい。

……贅沢ぜいたくなかなあ、私。与えられたものだけで満足して生きていくべき？

弱気になる瞬間はある。しかし、子供はどうしても欲しい！これは、社長になるずっと前から望んできた。

そもそも、お金持ちになろうとして起業したわけじゃない。ちよつとしたアイデアを形にしようとしたら、あれよあれよという間に人気が出て、報酬はあとからついてきただけだ。

世の中、DVや虐待やネグレクトなど、悲惨なニュースはあとを絶たない。多くが精神面か金銭面のトラブルのように見える。ならば、片親だけ愛情と資産を充分に与えてやれる自分にも、子供は育てられるかもしれない。それほどひどいことにはならないはずだ。

あれこれ悩みながらも、必要なアクションは起こしてきた。トントン拍子びょうしに話は進み、引き返せないポイントまできている。

あとは龍之介の提供を受け、クリニックで処置してもらおうだけ。

流れゆくビルの灯りを目で追いながら、龍之介の端正な面差しおもてざを思い浮かべた。

隠し事のある、ミステリアスなCEOかあ……。敵に回したくはないタイプかな。いろいろと裏がありそうな人だけ……

どこかのパーティーで彼と出会っていたら、と妄想する。

きつと、儀礼的な挨拶を交わすだけだ。どれぐらい利益はあるかな？ とお互い値踏みしながら

上つ面だけの場で心を通わせるのは難しい。茜音が見え透すいたお世辞を言い、龍之介が冷ややかに返す光景が目につかぶ。

そうして、空虚な疲労を抱えて家路につくのだ。いつものように。

龍之介は特にガードが堅そうだし、名の知れた経営者はスキャンダルを警戒しなければならぬ。気に入ったから二人で会おうよ、なんて軽い世界ではなかった。

あの人の子供を産むのかあ……。私が……

胸中は複雑だった。そんなこと、初めからわかっていたはず。あえてこの道を選んだのだから、今さら迷つてもしょうがない。

もう、やるしかない。賽は投げられたのだ。臆病風おびんぼうかぜに吹かれてご破算にすれば、あらゆる努力が水の泡になる。

思わず武者震むしやぶるいし、ぐつと拳を握った。



それから茜音は、龍之介の指示どおりクリニックに足を運び、カウンセリングを受けた。そこで、大きな問題が発生する。

処置の詳細について説明され、これから我が身になにが起きるか知り、急に怖くなったのだ。

ある程度の痛みやリスクは想定していた。しかし、あのことを抱えているからこそ怖い。だって妊娠とは、人体という複雑に組み上げられたプログラムに、想定外のデータを投げ込むようなものだ。十分に検証されていけば問題ないけど、茜音のケースはなにが起きるかわからない。茜音が傷つくだけならまだしも、子供になにかあれば取り返しがつかない。

元々茜音は、極度の怖がりなのだ。

茜音は自分の不安を医師にも話せなかったし、聞かれもしなかった。クリニックの人たちは事実婚とはいえ、龍之介と茜音をカップルだと思っているから、当然といえば当然だろう。

誰にも言えないままクリニックから足が遠のき、ダラダラと二か月が過ぎる。

そんなある夜、茜音はリビングのソファに座り、通話を終えたスマートフォンをじっと見つめていた。

画面に映っているのは、世界最高のセキュリティを誇る、*「カーヌン」*。

二者間のチャット、音声通話、ビデオ通話機能などを提供している、知る人ぞ知るアプリだ。やり取りは高度に暗号化され、その履歴も完全に消去されて復元不可能という、絶対に知られたくないやり取りに最適である。イスラエルのソフトウエア会社が開発したものだそうで、各国首脳や情報機関の職員がこのアプリを使っているらしい。

龍之介の指示でインストールし、彼とのやり取りはこのアプリだけで行っている。龍之介クラスになると、気軽に電話やSNSはできないらしい。

スキヤンダルを警戒する、セキュリティ意識の高さかあ……。けど、ちょっと過剰な感じするよ

ねえ……

たしかに著名人は基本、セキュリティ意識が高いのは間違いない。著名人の知り合いは多くいるけど、龍之介のそれは顕著だった。

契約出産という、スキヤンダルになりかねないネタを扱っているとはいえ、超高価な国家レベルのセキュリティアプリを入れるなんて、大げさと言わざるを得ない。

これってさ、秘密組織のエージェントみたいじゃない？ これはもう、菱橋さんの正体は某国のスパイ説、急浮上してきたぞ……

そう思ってしまうのは、スパイアクション映画の観すぎかもしれない。

というのは冗談として、なにかにすごく脅えてる？ スキヤンダルがそんなに怖いのかな？

どうも彼の人となりになんかそぐわない。仮に騒がれたとしても、真実ならありのままを告白すればいいだけだ。その辺の肝っ玉は据わっているタイプに思えたけど……

恐れているのは、スキヤンダルではない？ ……なにか別のもの？

正直、わからない。彼と直接話したのはSoufflyのオフィスで面談した一回だけで、お互いのことをあまりよく知らないから。

先ほど、スケジュールの遅延に気づいた龍之介からビデオ通話があり、こんなやり取りをした。

『は？ 方法を変えて欲しい？ どういうことですか？』

案の定、龍之介は画面の向こうで不満の声を上げていた。

「えーと、あの……カーヌンのメールでご説明したとおりなのですが……」

茜音がマイクに向けて言うと、龍之介は被せ気味に切り返す。

『要求と謝罪は把握はあくしました。ですが、方法を変えろという理由はなんでしょう？ なぜ、方法を変えたいんですか？』

「すみません、ちょっと、どう言えばいいんだろ。いろいろプライバシーに関わる部分で……」

我ながら、しどろもどろだった。普段はもっとテキパキしているのに。

龍之介を前にすると蛇へびににらまれたカエルみたいになっちゃう。『まさか、ここまできてやっぱりやめますと、遠回しにそうおっしゃってるんですか？』

「いやいやいや、とんでもないです！ 計画自体をやめようという意味じゃないです」

『どうやら、嘘を吐いているわけではなさそうですね。なぜ、理由を口にできないんですか？ 誰かをかばっているとか？』

内心ドキッとした。

誰かをかばっている……そのとおりだ。かばっているのは茜音自身だけだ。

龍之介はため息を吐き、額ひたいに落ちた前髪をさつと払った。そのとき、カフスから手首に巻かれたメタリックな腕時計がのぞく。

温かみのあるローズゴールドで文字盤の部分が黒く、気品を感じさせるデザインだ。アパレル業界にいる者なら誰もが知る、スイスの高級時計メーカーのものだった。価格はたしか数百万円するはず。

香水とか靴とか時計とか、小物のセンスがすごくいいなあ。しかも、本人がそれに負けてない

し……

アパレルに従事する者として、素直に称賛の念が湧いた。どんなに高級品を身につけても、多くの人はそれに吞まれてしまう。

龍之介は別格だった。まるでグラビアを飾るトップモデルのように、目玉が飛び出るほど高価なものを、悠々ゆうゆうと身にまとっている。小物たちも龍之介の魅力を引き出すため、喜んで役割を果たしているように見えた。生産者からすれば、苦勞して生み出した商品じしょうをこういう上客じょうきゃくに使ってもらうのは、冥利みょうりに尽きるはず。

そんな茜音の視線に気づかず、龍之介は考え込んで言った。

『すみません。少し言い過ぎました。我々はあくまでパートナーで対等です。ですから、私もなるべくあなたの意向に沿うよう、努力したいと思っています。これから長い付き合いになるわけですから……』

「そうですね。ありがとうございます……」

『なので、できればあなたにも率直に話して頂きたいのです。別に取って食ったりしませんから。我々もいい歳ですし、お互い言えないことの一つや二つあるでしょうし……』

お互い言えないことの一つや二つ……？

自信に満ちた物言いから、急にゴニョゴニョと語気が弱まった。ということは、やはり……
「そうおっしゃるってことは、菱橋さんにもなにか、言えないことがあるんですか？」

言ってしまったから、踏み込みすぎたかな、と後悔する。プライバシーの侵害は茜音自身、一番

されたくないことなのに……

龍之介は肘掛けに片肘を載せ、握った四本指に頬を押しつけ、頬杖をついた。

じつと見つめてくる画面越しの瞳が、青みがかったグレーであることに気づき、ドキッとする。まだ仕事かららしい。役員室らしき洒落たインテリアをバックに、龍之介はネクタイを外し、第二ボタンまで開襟かひきしていた。斜めに走る首筋は太く、ゴツゴツした鎖骨さこつこつがのぞいている。まくった袖から伸びる腕も筋肉質で、繊細な面差しおもてざとのギャップが好ましかった。

『まったくと言えば、嘘になるでしょうね。ですが、契約にはまったく関係のない話です』
あくまで龍之介は淡々と言葉を続ける。

『あなたの秘密を洗いざらい話せ、と言ってるわけではありません。ただ単に、方法を変更する理由を知りたいだけです。これは契約に関わる重要な部分ですし、人工的な方法については最初に合意したはずですから』

「そ、そうですね……。別に引つ張るつもりもないんですが、どう説明したらいいのか考えあぐねていたんです。くだらないと思われるかもしれませんが……」
こうなったら、核心部分はぼかして説明するしかない。

それから数分掛け、茜音はどうにか説明した。

話を全部聞き終えた龍之介は、ピクリと片眉を上げて聞き返す。

『……え？ 怖い？』

「ごめんなさい。私、本当に生まれつき超がつく臆病者で……」

理解不能なことを懸命に思索する、といった表情で、龍之介はさらに聞いた。

『なにが怖いんです？ 処置に伴う痛みが怖いとか、失敗が怖いとか、それとも道徳的に怖いか？』

申し訳ない気持ちに襲われつつ、正直に言うしかない。

「全部、ですね。人工的な処置そのものも怖いし、当然痛みも怖いし、失敗するのももちろん怖いし、道徳的にはずっと迷いがあります」

『しかし、妊娠して出産するというのはそもそも……』

「そうですね！ 妊娠出産が尋常じゃない痛みを伴うのは理解しています！ だけど、クリニックスで処置の説明を受けているうちに、すっかりおじけづいてしまって……。出産については覚悟を決めました。できれば妊娠だけは方法を変更したいなと思って」

ふざけるな！ と雷が落ちる気がして、身を固くして待つ。

予想に反し、龍之介は長いため息をはーつと吐いた。そして、物憂げものうげに口を開く。

『わかりました。怖いというなら仕方ない。恐怖心を取り除くことなんて、私にはできません。それに、妊娠出産は女性にとつて命懸けの行為です。金銭があがえるようなものじゃない。私もなるべく桐ヶ崎さんの意向に沿えるよう、努力すべきだと思ひ直しました』

希望の持てる言葉に、思わず顔を上げる。

「そうですか？ なら……」

龍之介は渋々といった様子でうなずいた。

『ええ、変更を受け入れます。あなたの望むとおり、自然な方法で構いません。まだ始まったばかりですし、これしきのことでは計画を頓挫させたくない』

「ありがとうございます！ 本当にありがとうございますっ！ よかったあ……。もし、菱橋さんに断られたら、もうあきらめるしかないぞと思いついてたんです。よかったあ……」

安堵のあまりソファに倒れ込みたくなる。

すると、龍之介は硬い表情のまま言った。

『桐ヶ崎さん、わかっていますか？ 自然な方法をとるとはつまり、私と性交渉を持つということですよ？』

言葉が耳から入り、鋭く脳髓に刺さり、理解するまで数秒を要した。
不意に訪れる沈黙。

このとき龍之介は、怒っているような笑いを堪えているような、形容しがたい表情をしていた。

「あ……。そ、そうですね。そういうことになりますよね……。今一瞬、失念してました」
言いながら、頬が熱くなっていく。

たしかに彼の言うとおりなんだけど、他にいろいろ懸念事項がありすぎて見落としていた。

『あなたのほうから変更を提案してきた、ということは大丈夫なんですね？』
しまった。全然考えてなかったぞ。

両手で口を押さえたポーズのまま、フリーズする。あのことを隠しとおすのに必死で、すっかり忘れていた。

自然な方法をとるとはつまり、彼とエッチするということ。

クリニックの処置を回避したところで、結局同じことだったわ……

『桐ヶ崎さん？ わかっていますか？ 大丈夫ですか？』

龍之介に念を押され、慌ててブンブン手を振った。

「だ、だっ、大丈夫ですよ！ 大丈夫に決まってるじゃないですか！ 大丈夫じゃなければ、そもそもこんな提案しませんよ！」

『……本当ですか？ 私には「しまった、そこまで考えてなかった。ヤバイからとつさに誤魔化そうとした」という感情の流れが、見えた気がしたのですが？』

龍之介に半眼でにらまれ、凶星すぎて冷や汗が噴き出す。

「き、気のせいですよ。すべて想定範囲内です！ もちろん」

一難去ってまた一難だ。こうなったら、あのことを彼に話したほうがいいんだろうか？ 話さないでマズイのは百も承知なだけけど……

ちよっと待てよ、と思ひ直す。もしかしたら、話さなくてもいけるかもしれない。ここでのカミングアウトは早計だ。

「とにかく、私のほうは大丈夫ですから。ご心配なさらないでください」

いろいろ大丈夫じゃないけど、そう言うしかなかった。

「菱橋さんのほうはどうですか？ そもそも菱橋さんがNGでしたら、自然な方法なんて不可能ですよね……？」

龍之介は眉をひそめ、メガネのブリッジを中指でそっと押さえた。メタリックなシルバーフレームが、知的な彼の雰囲気によく合っている。

ふと、彼の手に目を奪われた。

……あ、手。すごく大きいな……

指先から手首まで、茜音以上の長さがある。手の甲に浮き出ている、細長い骨の造形が美しい。指の一本一本がしなやかに伸び、少し節くれだっていた。切りそろえた爪は清潔で、手の甲にすーっと走る太い血管が、男らしい。

これほどまで綺麗な指に触れたら、どんな感じがするんだろう……

喉の奥のほうで、チリツと渴望が疼き、少し触れてみたくなる。画面越しなのが、ひどく残念に思えた。

龍之介はすっとメガネを外した。レンズをたしかめるように、メガネをくるくる回したり、縦にしたり横にしたり、美しい指先でもてあそぶ。

繊細な指先の動きを、なんとなく目で追ってしまった。

ややあって、龍之介はふたたびメガネを掛けて言った。

『……俺は、大丈夫だけど』

あれ？ 今、俺って言った？

語調の小さな変化に気づく。

さっきまで一人称は「私」じゃなかったっけ？

龍之介の視線は無機質で、その美貌からはなんの感情も読み取れない。

大丈夫、大丈夫。大丈夫ってことは……私とならエッチできますよって意味？

無性に恥ずかしくなり、顔だけでなく体が熱くなる。

よくよく考えたら、恥ずかしいやり取りだ。先に茜音が「あなたとならエッチして大丈夫」と宣言し、龍之介が「俺もできる」と宣言し返したみたい。いや、必要なことだからしょうがないんだけど……

こんなことで照れている場合じゃないのに、なぜか龍之介が相手だと調子が狂ってしまった。素敵だと思っ部分も多いし嫌いじゃないのに、どうも苦手意識があった。

『それじゃあ、どうしようか？ いつにする？』

龍之介はスマートフォンを取り出し、長い指でそっとタップした。

美しい指先にあらぬ想像を掻き立てられ、ますます体が熱くなる。

いやいや、今はそれどころじゃないぞ、と必死で理性を掻き集めた。急にタメ口に変わり、距離が一気に縮まったようで、ヘドモドしてしまう。

昔からこのテのクールなイケメンは苦手だった。契約交渉やビジネスの場であれば楽勝なんだけど……

『どうする？ 俺はいつでもいいけど』

龍之介は視線を上げ、重ねて問う。

「あつ、で、でしたら、月経の周期も関係してますので、クリニックの先生に確認しないと……」

『それもそうか。じゃ、そっちから連絡してくれる？』

「はい。タイミングがわかりましたら、私のほうから連絡します」
どうにかそれだけ答え、通話を切った。

◇ ◇ ◇

——茜音って美人だよ。それは絶対間違いないの。パッと見すごく華があるし、目鼻立ちくつきりでメイクも上手だし、服装もオシャレでよくも悪くも今風なんだよ。

こう評してくれたのは、親友の安藤朝美だ。

——社長で美人でオシャレでさ、性格もサバサバして頼りになるのはいいんだけど、ぶっちゃけ、隙がなさすぎるんだよね。男の人ってほら、女性の弱いところに惹かれるって言うじゃない？

朝美の言うことは的^まを射ている。茜音だって、ほんわかして弱さのある女性は魅力的だと思うから。けど、そう簡単に自分の性格は変えられない。「はい。それじゃあ、今から弱くなってください」と指をパチンと鳴らし、とたんに隙と弱さに溢れた女性に変身できるなら、苦労はしないのだ。

——茜音が海外の精子バンクに駆け込むぐらいなら……と思つて、菱橋君を紹介したものの、よかつたのかなって今でも悩むよ。菱橋君と茜音って、まあまあお似合いじゃないかと思つたのはたしかなんだけど。

紹介してくれた朝美には心から感謝している。お似合いかは契約に関係ないし、成功するかどう

かは二人の手腕に掛かっているし。仮にうまくいかなかったとしても、朝美に責任はまつたくない。龍之介について聞くと、朝美はこう答えた。

——私がこれまで出会ってきた男性の中でダントツで頭がよくてルックスも抜群、名家の出身で申し分なし。だから、遺伝子だけ見たらこれ以上ない人だと思ふ。

さらに大企業のCEOで超がつく資産家。むしろ、欠点を見つけるほうが難しい。

——でも、実は私も、菱橋君のことをよく知らないの。あまり自分のことを話さない人だったし。ただ、昔は人懐っこくて少年みたいな人だったのに、銀行に入ってから……違うな。CEOになつてから、すごく変わった印象があるなあ。

人懐っこい？ あれの、どこが？ たしかに紳士的で礼儀正しいけど、それは親しみや人懐っこさからは対極にあるような……

——そうなんだよね。最近は茜音の言うように、人間味が薄くなつたっていうか……心を開いてくれなくなった、かな？ 警戒心が強くなって冷たくなつた感じ。まあ、あれほどの地位を築いたら、仕方ないことかもしれないけど……

以上が、朝美から聞き出せた情報のすべてだ。目新しさはなかったけど、一つだけ気になる点があった。

CEOになつてから、すごく変わった……
いったいなにが彼を変えたの？

仕事に忙殺されたせいなのか、ありあまる資産に群がる人々を見て疲れてしまったのか、あるい

はCEOという地位が彼を傲慢にし、温かみを奪ったのか……

最後については「否」と声を大にして言いたい。茜音も運よく経営者になれたけど、ヒラ販売員だった頃と今を比べ、茜音自身はまったく変わっていないと断言できる。肩書きがよくなったぐらいで、ホイホイと人は変わらないものだ。

なら、他になにか原因があるのかな？ 菱橋さんを変えたもの……
考察はここで止まってしまおう。これ以上彼について知りたければ、直接本人に聞くしかない。

茜音は基礎体温を測り、クリニックで妊娠しやすい日を割り出してもらった。

約束どおり、龍之介に日程を告げると、意外な返事が返ってくる。

——都心だと人目があるから、郊外に出ないか？

まさかの二泊三日の小旅行。栃木県の奥日光にあるという、龍之介が所有する別荘に誘われた。

わざわざ奥日光まで？ 都内のホテルか、どちらかのマンションでよくない……？

過剰なセキュリティ意識、というワードがふたたび脳裏をよぎる。会ったり連絡したりするのに、ここまでビクビクしていたら、なにもできない。それこそ、マスコミの思うツボだ。

それとも、恐れているのはマスコミじゃなくて、なにか別のものとか……？

龍之介の意志は固く、結局別荘へ行くことに決まった。恋人じゃあるまいし、二人きりで旅行するのは複雑な気持ちだった。計画のためには必要かもしれないけど……

そんな茜音の胸中を察してか、龍之介はこう付け加えた。

——あまり深く考えず、お互い息抜きしないか？ たまには自然の多いところで、友人同士の気楽な旅行として。

そこまで言われたら、特に異論もなかった。もつとお互いを知ったほうが今後のためになるし、会ってすぐやることだけやってはい解散、というのも嫌だし。その点、彼も同じ考えなのがわかり、ほっとした。

あの菱橋さんと二人きりで旅行か……。緊張しそうだけ……

楽しいような怖いような、そわそわと落ち着かない一週間を過ごす。幸い新プロジェクトの立ち上げで忙しく、あつという間に時間は流れた。

とうとうやってきた週末。

直前になって三回も待ち合わせ場所を変えさせられ、あまりに強すぎる龍之介の警戒心に、さすがの茜音もげんなりした。

菱橋さん、実は某国のスパイ説、ガチなのかも。ここまでくるとさ、もうセキュリティ意識とかじゃなくない？ なにがしかの病気じゃない？ けど、健康診断書には書いてなかったよなあ……
内心でぶつくさ愚痴りつつ、JR中野駅南口のロータリーで小さなスーツケースを手に、龍之介の迎えを待った。

早朝六時前。遠くからでも聞き分けられる不穏なエンジン音とともに、それは現れた。

朝日を浴びてきらめく、流線形のボディ。車に詳しくない茜音も知っている、イタリアのスポーツカーだ。深みのあるメタリックゴールドが、控え目なのに気品があつて力強く、異国の砂漠をほ

うふつさせた。

折りたたんだ翼を広げるように、ドアが上にスライドしながら開き、車というよりスペースシャトルみたいだ。龍之介が降りてきて、スーツケースをトランクに積んでくれた。

助手席に乗り込むと車高は低く、中はずらりと計器に囲まれ、コックピットと呼ぶほうがふさわしい。

これは完全に『ハーデスト・ミッシェンズ』ね、と茜音はワクワクした。『ハーデスト・ミッシェンズ』とは今世界中でメガヒットし、世界歴代興行収入ランキングの上位に食い込んでいる、アメリカのスパイアクション映画だ。洋画大好きな茜音はもちろん大ファンだし、シリーズのDVDはすべて持っているし、劇場の来場者特典であるクリアファイルとうちわは大切に飾ってある。

『ハーデスト・ミッシェンズ』には秘密を抱えたCEOが登場し、ハイレベルのセキュリティで守られている。しかし、命を狙われる彼は、愛車の最高級スポーツカーで壮絶なカーチェイスを繰り広げ、激しい銃撃戦と胸躍るアクションで観客を魅了するのだ。

そして、ミスティアスなCEOの正体は、秘密組織のエージェント！

「……合言葉は？」

シートベルトを締めながら茜音が言うと、龍之介は侮蔑も露わに「は？」と返してきた。

なるほど。冗談はまったく通じない、と……

スパイごっこが完全にスルーされ、一抹の寂しさを覚えながら丁寧に「おはようございます」と言い直すと、龍之介は「おはよう」と冷ややかに言った。

今日の龍之介は、ボディラインがはつきりわかるタイトなカットソーに、爽やかな白いジャケットを羽織り、テーパードパンツがとても似合っている。黒髪は無造作に下ろし、スーツ姿のときより少年っぽく見えた。

へええ……すっごい素敵かも。スーツ姿も格好よかったけど、今のほうがはるかに……

少し鼓動が速まっているのは、緊張のせいだけじゃないかもしれない。顔かたちの美麗さや着こなしの妙味みょうみに惹きつけられ、彼から視線を引き剥はがすのに苦労した。

これほどまで格好よすぎると、釣り合う女性を探すのも大変だろうなあ……

イケメンすぎるがゆえの苦労はありそうだ。何事もほどほどがいいと言うけど、茜音みたいに出会いがなさすぎてもダメだし、彼みたいにモテすぎてもダメだし、針が振りきれた者同士なのかもしれない。

意外にも龍之介は運転がうまかった。怪獣の咆哮ほうごうみたいなエンジン音を響かせ、暴れ馬をいさめるがごとく悠々と乗りこなしている。どこにギアがあるのかわからないけど、龍之介はボタンやパッドに触れながらうまくシフトアップしているらしい。

シートは体にフィットして乗り心地は抜群だし、運転は安心して任せられた。

早朝だからか、道は混んでいない。車は首都高中央環状線に入った。このまま池袋方面へ向かい、川口経由で東北自動車道に行くらしい。

さつきまで晴れていたのに、ポツポツと雨が降りはじめた。龍之介は進行方向を見据え、茜音は車窓に視線を漂わせている。

車内には沈黙が降り、ワイパーがフロントガラスを拭う音だけが響く。「少し、警戒しすぎじゃないですか？」

先に沈黙を破ったのは茜音だった。

龍之介は「え？」と横目で茜音を見て、問い返す。

「それは、警備上の安全対策のこと？」

ちゃんとわかっているじゃない、と思いつつ茜音は「そうです」と答えた。

「菱橋さんほどの地位になると仕方ないかもしれないですけど……」

「龍之介、でいいよ。いつまでも名字で呼ばれると堅苦しいし」

「なら、龍之介さん、で」

「うん」

「その、警戒する気持ちはわかるんですけど、ちょっとやり過ぎかなって……。気にしすぎて日常生活に支障をきたしたら、それこそ本末転倒ですよ。プライバシーが多少、マスクミヤネットに漏れたとしても、そこまで悪いことにはならないんじゃないかなって」

チャリと龍之介を見ると、険しい表情で進行方向をにらみつけている。

しばらくして、龍之介は重い口を開いた。

「別に、マスクミヤネットを警戒してるわけじゃない」

「なら、いったいなにを……」

「そのことなんだけどさ」

鋭い口調にさえぎられ、びつくりする。

龍之介は少し声のトーンを落とし、続けた。

「詳しく言わなきゃいけないかな？ ちょっと、いろいろと事情があるんだ。だが、契約には直接

関係ないことだし、話す必要はないと思ってる。前も言ったと思うが」

「もちろん、絶対話さなきゃいけないことなんて、ありませんけど……」

「ちょっと、説明が難しいんだが……」

龍之介は苦々しく美貌を歪め、言葉を選びながら言う。

「別にやましいことがあるわけじゃない。極力君に迷惑は掛けたくないし、かかる負担は全部俺が持とう。それに、これは君自身を守るためでもあるんだ」

「私自身を守るため？ どういうことですか？ なにか危険があるってこと？」

「安全か危険かと言えば、危険だと言っておくよ。何度も言うが、君には関係のない話だ。深く知ろうとしなければね」

そんな風言われると、余計気になってしまう。

「これ以上は、詮索無用」

ピシヤリと言い放つ龍之介。

その冷たい横顔は、あらゆる探りをシャットアウトしていた。

「なら、最後に一つだけいいですか？ その件は今回、龍之介さんが契約を結ぼうとした動機に関係ありますか？」

すると、龍之介は眼球だけをギョロリと動かし、茜音を横目で見た。

「勘が鋭いね。そのとおりだよ」

ふたたび降りる沈黙。

契約には直接関係ない。やましいことじゃない。私を守るため。安全が危険かと言えば、危険。今回の契約を結んだ動機に関係アリ……

足りない脳みそを絞ってあれこれ考えてみたけど、さっぱりわからない。

自然と深いため息が出てしまう。

なんか……。とてもじゃないけど、今から二人で子作りする雰囲気じゃないよね……

本当に彼とそんなこと、できるんだろうか？

ここで、龍之介といたす流れを想像してみる。何事もイメージトレーニングは重要だ。

まず、二人きりになる。そして、寝室に行き、服を脱ぎ、灯りを消し、それで……

あれ？ と首を傾げる。シャワーはいつ浴びるんだろう？ 事前？ それとも、事後？

会話はどうしよう？ どっちが主導で進むの？ キスとかしたりするのか……

横目で彼を盗み見し、こんなに綺麗な男性と本当にするの？ と信じられなくなる。キリツと精

悍な彼が、エッチなことをする姿が、まったく想像つかなかった。

どうしよう。めちやくちやドキドキしてきちゃった！ 失敗したら、どうしよう？

一人で手に汗握り、はやる鼓動を抑えようとする。

「方法を変更しようって言われて、俺も正直、結構悩んだんだ」

唐突に龍之介がつぶやいたので、はっとして彼を見た。

「だが、大変なのはお互いさまだし、やるべきだと思った。このまま仕事に明け暮れていたら、あつという間に時期を逃してしまう。俺らのやろうとしていることは間違っているかもしれないけど、なりゆきに任せてみないか？ 君も経営者ならわかるだろう？ ときには、そういうのが必要だってこと」

そういうの……

「なりゆきに任せることですか？」

「うん、そう。目を閉じてさ、頭を空っぽにするんだ。すべてを捨てて、丸裸になったつもりで、ゴウゴウと音を立てる渦の中に、思いきって身を投げる……」

この言葉には、思い当たるところがあった。

会社を経営していると、そういう局面が何度も訪れる。失敗や損失から逃げてばかりいたら、なにもはじまらないのだ。

「つまり、考えるな。感じる！ ってことですか？」

それを聞くと、龍之介はうれしそうに微笑んだ。

「うまいこと言うね。そういうこと。深く考えずにアホになろうか」

その言葉に、思わず笑ってしまう。

やっぱりこの人はあなどれないな、と思った。人の心を掴むのがうまい。そして、パートナーをその気にさせるのも。

少しだけ、気分が軽くなつたような気がする。

いつの間にか緑が増え、東北自動車道に入っていた。蕭々と降りしきる雨の中、山あい的高速道路をスポーツカーは突き抜けていく。

車は日光宇都宮道路の清滝インターチェンジで降り、ヘアピンカーブだらけのいろは坂を上り、中禅寺湖を左に見てさらに北上する。雄大な男体山をのぞみ、戦場ヶ原をとおり抜けたところで、まだ奥へ行くのかなと茜音が思いはじめた頃、龍之介は小さな側道へハンドルを切った。別荘は、湯ノ湖を見下ろす静かな高台にあった。

色がまだらのレンガが積み上げられた建物で、ゴシック建築を模したものらしい。鬱蒼とした木々の間から現れたそれは、ヨーロッパの古城を思わせた。

砂利の敷かれたアプローチで車を降り、茜音は大きな建物を見上げ、心から絶賛した。

「うわああ……。すつごく素敵な別荘ですね。雰囲気があつて……」

ニューヨーク州スリーピー・ホロウの画家が所有していた保養所を買い取り、リノベーションしたのだと、龍之介は語った。その画家は茜音も知る人物で、アメリカ合衆国の名門一族、ロックウェル家の第四代当主であり、親日家として知られている。

「菱橋様、お疲れ様でございました。お食事の準備はできております」

かつちりしたウエイトレスの制服を着た、年配の女性が出迎えた。

五十代後半ぐらいだろうか。ひつつめた髪には白髪が混じり、目尻の皺が温厚そうだ。

「この管理をしてくださっている中森さん。ここに滞在中は中森さんのお世話になるから」

龍之介に紹介された中森は、深々と頭を下げた。

「よろしく願ひいたします。なんなりとお申しつけくださいませ」

「こちらこそよろしく願ひします」

茜音も慌てて礼を返す。

すると、龍之介と中森はひそひそとやり取りしはじめた。

「大丈夫だった？」

龍之介が問うと、中森は緊張した面持ちで言う。

「はい、問題ありません。現れなかったようです」

耳をそばだてていた茜音に、しっかりと聞こえた。

「んん？ 現れなかった？ ……誰が？」

「じゃ、先に邸内を案内するから」

中へ入るようながされ、なにも聞こえなかったフリをし、彼のあとに続いた。

「中森さんは夜にはいなくなるから」

さりげなく耳打ちされた艶っぽい響きに、どうしようもなくドキドキする。

邸内はため息が出てしまうほど、贅の凝らされた空間だった。

まずは、広々としたリビング。目にまぶしい真っ白なカバーが掛けられたソファが、爽やかなチークのテーブルをぐるりと囲み、何十人もくつろげそうだ。

西側の壁はすべて取り払われ、湖に向かってリゾート風のウッドテラスが繋がっている。

軽く十人は座れるダイニングには、薔薇の蓄のようなシャンデリアが、用意された二人分の銀食器を照らしていた。

「一階に屋内のヒノキ風呂、二階に露天風呂があるんだ。どちらも、源泉掛け流し」
龍之介の説明に、茜音は内心大喜びだ。しかも、立派なサウナと水風呂にジャグジーも付いているし！

ベッドルームは数えきれないほどあった。露天風呂付きのものと同室も含めると、六つか七つか。キッチンも、シェフが調理の真つ最中というところで立ち入り禁止だったが、古今東西のワインで埋め尽くされたワインセラー、ビリヤードが楽しめるプレイルームにシアタールーム、さらにリビングの一角を低くし、暖炉を備えたシガースペース、地下にはトレーニングマシンのあるジムとスカッシュコートがあった。

一部屋ずつ案内されるたび、感嘆せずにはいられない。豪邸を紹介する住宅情報番組の、インタビュアーになった気分だった。

「そんなにめずらしくもないだろ。リアクションが大げさすぎないか？」

冷やかに言う龍之介に、茜音はぶんぶん手を振ってみせる。

「とんでもない！ 私は庶民派ですから、これほどまでゴージャスな別荘はさすがに経験ないです」

ダイニングに戻り、腕のいいシェフがこしらえたという、フレンチのコース料理を食べた。

見た目の美しさも、味の繊細さも、かつてないほど素晴らしく、すっかり感動してしまう。龍之

介クラスになると、神様みたいな腕を持ったレジェンド・シェフが、世界中どこにでもついてくるらしい。

それから数時間後、茜音は独り二階の露天風呂から、湯ノ湖をはるかに眺めていた。

別荘は高台の斜面に建っているため、視界をさえぎるものはなにもなく、湯ノ湖の全貌をじっくり観賞できる。男体山や温泉ヶ岳、金精山といった山々に抱きかかえられるように湯ノ湖がある。

それは、胸に迫ってくる絶景だった。

霧が出てきたのか、山頂は白く覆われ、深い緑とも群青ともつかない湖面には、サアーツと小雨が降り注いでいる。深い静寂に包まれ、時折、鳥の鳴き声と葉擦れの音がかすかに響いた。

空気は澄み渡り、湖の精霊が降臨したかのような、幽玄の世界がそこにある。

この標高は千四百メートルを超え、気温はぐっと下がって秋の終わりぐらいの気候だ。冷たい空気が火照った肌心地よい。覆いや遮蔽壁がうまく設計されており、全裸で立っていても誰かに見られる心配はなかった。呼吸するたび、体の隅々まで浄化されていく気がする。

ゆっくり緑を眺めるのはひさしぶりだった。日々がせわしなく頭がビジネスモードになっていると、四季の移り変わりや自然の恵みに無頓着になる。感覚は鈍くなり、今の季節ってなんだっけ？と思うことも少くない。

それにしても、昼間のアレは……

別荘に着いたときの、龍之介と中森のやり取りが気になる。

——はい、問題ありません。現れなかったようです。

このときの、二人の緊張した面持ち。「現れなかった」と聞き、龍之介はホツとしているように見えた。ということは、つまり……

誰かが現れるのを、恐れていた？ やっぱり、芸能記者とか？

——別に、マスコミを警戒してるわけじゃない。

ここへ来る道中、そう言ったのは龍之介だ。なら、マスコミ関係者ではない、別の誰か……？

「やっぱり、某国のスパイ説がガチ？ うう……寒っ！」

体が冷えてきたので、数歩下がってふたたび温泉につかった。

乳白色のお湯は少し硫黄いおうの匂いがし、体の芯から温まっていく。心地よさのあまり、腹の底から深いため息が出た。

「ああああああったかあ〜い！ もおおお、最高……」

独り言は、しっとりした空気に溶けていく。

まあ、考えてもしようがないか。彼が言うとおり、私には関係ないみたいだし……

雨の湯ノ湖はいつまで見ている、飽きることはなかった。温泉につかったり、浴槽の傍にあるカウチに寝そべったりを繰り返しているうちに、時間はまたたく間に過ぎていく。

ランチが終わったあと、龍之介は書齋で残った仕事を片づけると言った。夕方まで自由時間で、例の「夜の予定」はディナーのあとだ。

覚悟が決まったわけじゃない。この段階にきてはまだ、心に迷いは渦巻いていた。

龍之介はこの不安に気づいたんだろうか？ ランチのあとに距離を置いたのは、彼なりの気遣い

に思える。

——深く考えずにアホになるうか。

この言葉を思い出すと、心が少し軽くなった。



ベッドルームのドアを閉めた音がやけに響き、茜音ははっと顔を上げた。
「さて、このあとどうしようか？」

龍之介の声は少し硬く、茜音のほうを見向きもしない。

ヘッドボードにつけられた間接照明が、彼の高い鼻梁びりょうから唇のラインを淡く縁取えりっていた。

……お。めずらしく、神経質になってる？

茜音はそう見て取った。どんなことにも感情を動かさない氷の男が、緊張して動揺どうぶしている。

逆に茜音は、自分でも驚くほど落ち着いていた。

ベッドルームは和風インテリアの広い間取りで、キングサイズのベッドがドドンと鎮座ちんざしている。掃き出し窓から、先ほど茜音が入っていた露天風呂のカウチが見えた。ここから歩いて行ける造りになっているらしい。

茜音はガウンを羽織り、秘密兵器を隠していた。このエスニック柄のロングガウンは、前のポタンを留めればロングワンピースにもなり、ディナーや外歩きに行ける便利なデザインだ。吸水性と

速乾性に優れ、温泉やプールなどのリゾート地で重宝する、ボニーズスタイルの人気商品だった。

「そうですね。もう私はシャワーも浴びたし、特にこれ以上やることは……」

「俺もさつき浴びた」

「なら、準備万端かな。さつとやって、パツと終わらせちゃいましょうか？」

冗談めかして言うと、龍之介は眉をひそめ、冷やかかな一瞥をくれる。

「随分な言い草だな。そつちは慣れてるかもしれないけど、俺はこういうのは初めてなんだ」

トゲのある言いかたに、肩をすくめるしかない。

「別に慣れてるわけじゃないけど……。ここでいきなり感情的になるのはなしですよ。これは契約なんだし、極めてドライな展開になることは、最初からわかっていたでしょう？」

「それはそうだが、もう少し言いようがあるだろう？」

「イライラされても困ります。私に八つ当たりしたってむだだし。お互いのせいにならないように協力しましょうって、約束したじゃないですか」

「それはそうだが……」

龍之介は頭をくしゃくしゃと掻きむしった。あきらかに動揺している。

「そんなに難しいことじゃないんだし、とつとと終わらせて自由になりましょうよ。苦手なものは先に終わらせるべし」

「とつとと終わらせて……簡単に言うなよ。歯の治療じゃないんだぞ」

龍之介が動揺すればするほど、茜音は落ち着いていった。

あれ。なんか、意外と頼りない？ さつきまでの俺様キャラ、崩壊してない？

完全無欠のCEOが垣間見せる、頼りない一面。ちよつと可愛いと思ってしまったかも……

「なら、どうします？ 今日はやめておきますか？ イライラされても嫌ですし、こういうのは男性がダメなら成し得ない行為ですし……」

龍之介は、さつと頬を紅潮させた。

「ダメだなんて言っていないだろ。慣れないから少し緊張しているだけだ」

「なら、頑張りましたよっか」

さあ、ここで秘密兵器の御開帳だ！

えいやつ、とロングガウンを脱ぎ去る。なにかBGMでも流したいところだけど、設備がないからしょうがない。

龍之介がこちらを振り返り、石像のように固まった。

そこで、ピタツと時間が止まる。仁王立ちをする茜音と、それを見つめたまま動かない龍之介。なにを隠そう、秘密兵器とはこのシースルー・ベビードールのことである。我がボニーズスタイルの主力商品で、値段は都内で働くOLの月収約一か月分と、かなりお高めだ。

ゴージャスな総レース仕立てで、ボディ全体にリボンを結ぶようなデザインになっている。胸の蕾をかるうじて覆う、細いレースがバストを斜めに走り、みぞおちに小さなリボンがあり、そこから腰骨に向かってレース生地が垂れ下がり、ぐるりとお尻を囲んでいる。

囲んでいるといっても透け透けだし、みぞおちから臍の辺りは丸見え、背中とはばつくり開いてい

るので、全裸とほぼ変わらない。同じデザインのGストリング、いわゆるひも状ショーツもセットで販売されており、それも着けていた。

我が社が自信を持ってオススメする、エロス・オブ・エロスの勝負下着。バストに絡みついたレースを、胸の蕾が押し上げているのが艶めかしさの極み。あばらが露出しているから、ウェストがくびれて見えるし、レースの割れ目からのぞくお臍が、さらにエロスを演出してくれる……はず。「それ、どういうつもり？」

龍之介の氷のような声が、地獄の底から響いた。ように聞こえた。

ん？ もしかして、お気に召しませんでした……？

「あの一、サポートしようと思ひまして。アシストというか」

一応説明すると、龍之介はびっくりと片眉を動かした。

「……アシスト？ 俺のことを？」

「すべてを龍之介さんにお任せするのもアレですし、私もなにかできることはないかな〜と考えまして……。少しでも龍之介さんがナイスゴールを決めるための、アシストになれば」と

サッカードにたとえるとは、我ながらうますぎると思つていると、龍之介は眉間に皺を寄せた。

あれ。もしかして、あきれられちゃった……？ ちょっとこのベビードールじゃ、セクシーが過ぎたかな？

おもむろに、龍之介は着ている服を脱ぎはじめた。ヤケクソになつたように、脱いだ服を一枚ずつ床に叩きつけている。

あつという間に、彼はボクサーショーツだけになり、茜音は思わず息を呑んだ。

惚れ惚れするような肉体美がそこにあつた。予想よりはるかに引き締まつた体つきで、上腕筋がしなやかに隆起し、丸く膨らんだ胸筋を薄い体毛が覆つている。肩幅はがっしりと広く、腹筋も見るからに硬そうで、むだなぜい肉はいっさいない。マッチョ過ぎるしっこさはなく、女性なら誰もがひと目見て「素敵！」とテンションが上がるぐらいの、理想的な鍛えかただった。

これほどまで均整の取れた、筋肉美を誇る男性を見たことがない。ぶしつけとは知りつつ、じろじろ眺めていると、龍之介は酷薄な笑みを浮かべた。

「……慣れてるんだろ？ こういうの」

言いながら、龍之介は太股で近づいてくる。

……な、なんで彼は急に怒っているわけ？

なすすべもなく棒立ちになつていると、目の前まで来た龍之介に、素早く手首を掴まれた。

その握力の強さに、ドキリとする。

握られた手首が、ひどく熱い。

「なら、さつとやって、パツと終わらせようか。君の言つたとおりさ」

低い声は残忍に響く。

こちらを見下ろし、口角を上げる妖艶な美貌。

そのとき襲われた感情が、恐怖か興奮かわからないまま、背筋がゾクツと粟立った。



焼けるような素肌の熱さに、茜音は呼吸を止めた。

……うあつ……。熱いつ……

頬が、弾力ある胸板に当たり、ふわふわした体毛にくすぐられる。すぐそこで、龍之介の鼓動が轟いていた。

それ以上に、自分の心臓のほうが発火しそうだ。

うっとりするような香りに包まれ、まぶたの裏側がくらくらとする。

上品なオードトワレに、野性的な匂いが混じったようないい香り。鼻いっぱい吸い込むと、下腹部の芯に小さな火が灯る心地がした。

背中に置かれた龍之介の手がするりと下がり、ちょうど腰の中心にきたと思ったら、ぐっと力が込められ、彼の股間が密着する。

思わず、茜音は目を見開いた。

……あつ。こ、これは、もしや……？

きゃーっ、と声を上げそうになるのを、すんでのところで耐える。

彼のものは硬く大きく膨らみ、下腹部をぐいぐい押ししてきた。さらに腰を抱く手は力を入れ、容赦なくそれを押しつけてくる。

わわわ、わかった、わかったつてば！こんなにガチガチなら、心配することなさそう。あとはさくつと終わらせてくれれば……

冷静でいようとしても、ドキドキすぎて目が回りそうだった。

硬く怒張したものと、あまりに高すぎる体温が、彼の感じている興奮を生々しく伝えてくる。震えるほどの興奮に感染し、こちらもとんでもないテンションになっていた。

いったいなが彼をこんな興奮させているのかわからない。自分がなぜ、こんなにドキドキしているのかも。

嫌悪感はまったくくない。堪らなくセクシーないい香りと、たくましい筋肉の熱に包まれ、失神しそうなほど心地よかった。

うん。なんか想像していたより、はるかに素敵かも。この感じなら、そんなにひどい事態にはならなそう……

おずおずと彼の背中に両腕を回すと、がっしりした体躯はかなり厚みがあり、男らしくて好感度が上がる。

心なしか彼の呼吸が、荒い。

「……慣れてるんだろ？ こういうの」

声は挑発するように、意地悪く響く。彼はすでに、礼儀正しい男の仮面を取り去っていた。

いや、慣れていないどころか、まったく経験もないっていうか、なんとというか……

どう答えようかぐるぐる考えていると、龍之介はどんだん大胆になってきた。腰にあつた彼の手

がさらに下り、ベビードールの裾の内側に入ってきて、さわさわとお尻を撫で回す。

「……ん？ んんっ？ ちょよ、ちょよと……？」

大きな手のひらは、曲線をたしかめるように、お尻の表面をじわじわと這っていく……
触れかたがひどくいやらしく、さながら痴漢でもされているみたいで、くすぐったさに四肢がふるふる震えた。

けど、嫌じゃなくて。すぐくいやらしいんだけど、背徳感混じりの妙な快感があつて……

彼の触れたところから、産毛が逆立つような刺激が生まれる。もつとしっかりと触れて欲しくて、もどかしさが募った。

手のひらはゆっくり円を描きながら、舐めるように肌の表面を滑っていく……

指先はやがてお尻の谷間に侵入し、後孔をやりわり掠めたあと、秘裂の割れ目に到達した。花びらの内側をまさぐられ、腰がピクンツ、と跳ねてしまう。

「……あれ。ここ、まだまだじゃない？ そつちも準備できてるのかと思っただけ」

冷淡な声とは裏腹に、指先は花びらを一枚ずつめくり、割れ目をそろそろと愛撫しはじめた。感じやすいところに触れられ、背筋に震えが走り、変な声が漏れそうになる。

くちゅくちゅ、びちゅつと、かすかな水音が響き出す。

ん、ちょよ、ちょよと、くすぐった……ていうか、ああ……

ソフトなタッチが、気持ちよすぎて腰が抜けそう……

だんだん水音は大きくなり、腿の内側をぬるい液が伝い落ちた。

未経験の刺激に翻弄され、膝はガクガクと笑い、倒れないよう必死で彼にしがみつく。

彼は屈強な片腕で茜音を悠々と支えながら、信じられないほどいやらしい責め苦を与え続けた。

「ちょよ、ちょよと待……わたしっ……」

体に力が入らない上に、がっしり抱きかかえられ、簡単に逃げられない！

そうこうするうちに、指先は奥にある小さな花芽を探し当て、そろりと撫でた。

うわっ。うわわわっ……！

じんじんする刺激に耐えきれず、反射的に背筋が、ビツと伸びた。

しかし、彼の指はそこから撤退せず、花芽をしっかりと捕らえている。

「……足、もつと開けよ」

色っぽい声でそう命じられ、なぜか逆らえない。

従順なロボットみたいに、膝を震わせながらどうにか足を開いた。

すると、指先は卑猥に蠢き、小さな花芽をクリクリと押し回しはじめ……

「もつと、力抜けよ」

「あ、んっ、だ、だ……あ……」

柔らかいタッチで花芽を擦られ、いやがおうでも、うねりがせり上がってくる。

こんなところ、自分で触ったこともない。ひりつくような快感に間断なく襲われ、なにがどうなっているのか、自分でもわからなかった。

怖いんだけど超気持ちよくて、やめて欲しくないけど恥ずかしくて、ただ彼にすがりつくしかで

きない。

そのとき、別の指が蜜口から中へ、ぬるりと滑り込んできた。冷えた指が膣内の粘膜に触れ、んんっ、と息を呑む。

蜜口は粘りけのある蜜にまみれており、長い指は難なく奥まで、ずぶずぶと挿し入った。指のゴツゴツと骨ばった形が、クリアに感じとれる。

指はまるで男根がそうするように、奥のほうの媚肉をにゆるにゆる擦りはじめた。

「……っ！」

なっ、なにこれっ……。き、気持ちよすぎて、ヤバイッ……

指は巧みに花芽をもてあそび、同時に別の指が媚肉を揺さぶり、蜜が掻き出される。

どの指がどうなっているか、さっぱりわからないけど、現状を分析している余裕はなかった。

熱を帯びた媚肉が、ひんやりした指を少しずつ温めていく……

媚肉を掻いている指が、だんだん同じ温度になっていくのが、無性にドキドキした。

「……とろのぐちやぐちやだ。ほら……」

彼はわざと指を激しく出し入れし、ぶちやっつ、ぐちやっつ、と音を立ててみせる。

ちよ、ちよっつと、やめて……

恥ずかしいのに、「あっ」とか「うう」しか声が出ない。次々に迫りくる快感の波に、意識までさらわれてしまいそうだ。

のけぞった姿勢で体に力が入らず、左足だけツタのように彼の腿に絡ませ、まるでタンゴでも

踊っている状態だ。彼に抱えられながら、大きく開いた秘裂をいのように蹂躪され、ひたすら蜜を溢れさせた。

「威勢がよかつたわりには、追い込まれるのが早くないか？ まだまだこんなもんじゃないだろう？」冷笑しながら快感を送り込んでくる彼が、もう悪魔にしか見えない。

……た、体勢がキツイんだけど、き、気持ち……よくて……イッチャう……

奥まで潜り込んだ指の腹が、ずりりっ、と敏感なポイントを扶く。同時に、硬くなった花芽をつままれ、きゅっつと押し潰された。

すぐそこまで迫った大きなうねりが、腰の内側で白く弾ける。

「……あくっ。……あぁうっ……っ！」

ビクビクッ、と我知らず腰が痙攣し、絶頂に達した。

……な、なにこれ。……死んじやいそう……ああ……

あまりの気持ちのよさに、媚肉で彼の指を締めつけ、意識がぼんやり遠のいていく……どろり、と恥ずかしいほど大量の蜜が溢れ、足首まで流れ落ちた。

糸の切れた人形のようにくたつとした体を、片腕で楽々と抱え上げる彼が憎らしい。

モヤがかかった視界に、こちらをじっと見下ろす龍之介の美貌が映った。

「……大丈夫？」

心配そうにのぞき込まれても、肩で息をすることしかできない。

「じゃあ、ベッドに行こうか？」

先ほどまでとは打って変わって、いたわるような眼差しと声音。

初めて見せられた優しさに、なぜか胸がきゅんと切なくなった。

龍之介は軽々と茜音をお姫様抱っこし、ベッドにそっと横たえさせる。

仰向けになり、「両膝を立てた茜音は、龍之介を見上げた。

彼は膝立ちで片腕をマットにつき、茜音の体を眺めている。その、じっと身を潜めているようなさまが、これから獲物を仕留めようとする、ネコ科の肉食獣を思い起こさせた。ヒョウとかライオンとか、そういうやつ……

彼の上腕筋は滑らかに盛り上がっていた。肘から先の筋肉に続いている稜線を、つい目でなぞってしまふ。

メガネの奥にある目元は、相変わらず涼しげだった。まぶたを少し伏せ、じっと見入る灰色の瞳に、昏い熱がこもっていて、それが茜音を黙らせる。茶化したり挑発したりするのは、許されない気がした。

龍之介さん、なんか……いつもと全然違う。別人みたい……

こんなにも激しく、これほどまで劣情を露わにした視線にさらされた経験は、ない。不思議と気分は高揚し、自分がすぐ魅力的な女性に変身したような錯覚に陥った。

舐めるような熱視線が肌を照射し、そこが火傷したみたいにひりひりする。

絶頂の余韻はまだ、体にまとわりついていた。頭はポツとし、秘裂のひりつく感じは抜けず、肌のあちこちが鋭敏になっている。

ひんやりしたシートが火照った肌に心地よかった。上質な柔軟剤を使っているのか、アロマのようないい香りがする。

「……ここ、すごい勃ってる」

胸の蕾が石のように硬くなり、ベビードールの薄いレースを押し上げていた。

両方の胸の蕾をきゅっとつままれ、「ううっ」と声が漏れてしまふ。大きな手がレースの生地ごと乳房をわしづかみ、いやらしく揉みはじめた。

……あ。ちよ、ちよっと……そこは……

「ここ、すごい綺麗だな……」

純粹に感心する声に、体が熱くなる。

褒められるのはうれしいけど、それ以上に恥ずかしいよ……

骨ばった指で蕾を愛撫され、恍惚となった。乳頭の敏感なところを、指先がそろりと掠めるたび、細い電流がチリッと流れる。

こうして揉まれるのも嫌じゃなくて、レース越しの接触がもどかしく、直に触れて欲しい渴望が芽吹く……

あ、な、なんか、すごいエッチな気分がまた……

蕾はレース越しに見えるほど朱色を帯び、秘所がしっとり潤っていくのがわかった。

指遣いはまるで、繊細な旋律を奏でるように、優しい。

こんな風に丁寧に愛でられると、官能的な気分が高まり、どんどん肉体が開いていく……

「なんか、俺宛てのプレゼントを開けるみたい」

そう言いながら彼は、みぞおちに結ばれたリボンをするするとほどき、ベビードールを脱がした。声は意地悪なのに、触れかたや手つきは慎重でソフトだ。

彼の本性はどっちなの？ 意地悪な声なのか、優しい触れかたなのか……。もしかして育ちがいいせいで、根っから女性に冷たくできない人とか……？

ぼんやりそんなことを考えていると、端正な唇が胸元に近づき、膨らんだ蕾をばくつと啜えた。ぬるぬるした舌が、尖った蕾に巻きつき、抑えきれない声が漏れる。

「……んんふっ!!」

敏感な蕾が濡れた舌に包まれ、ころころと転がされた。ぬるぬると淫らな刺激が小さく弾け、耐えがたくくすぐったい。

「あ、だつ、ダメ……」

背筋をおのかせ、もがくように彼のうしろ頭を掴む。しかし、うまく力は入らず、硬い黒髪をくしゃくしゃにしただけだった。

彼はまったく意に介さず、すぐく美味しそうに二つの膨らんだ蕾を交互に舐めしやぶる。

あ……き、気持ちいいんだけど……。くう、くすぐったつ……

夢中で吸い上げるさまが、赤ちゃんみたいで可愛く思え、よしよしと彼の頭を撫でてみる。けど、口腔内で繰り返される蕾へのいやらしい仕打ちは、発情した大人の雄のそれで、やっぱり可愛くないかもと顔をしかめた。

りゅ、龍之介さん、なんかエロすぎて……。ちよ、ちよつと……

乳房をやわやわと揉みながら、高く尖った蕾を舐め上げては、ちゅうちゅうと強く吸い上げる。

濡れた舌が乳頭を擦るたび、淫らな刺激が散って、四肢が打ち震えた。

「ああ……綺麗だな……」

うっとりした様子で蕾を見つめ、彼は言う。

蕾はかつてないほど大きく膨らみ、しゃぶられたせいで唾液が艶めかしく光り、苺キャンディみたいに見えた。

彼は荒い息を吐きかけながら、さらにキャンディを貪り尽くす。そのガツガツした勢いが、本当に食べてしまいそうに思え、少し焦った。

乳房の柔らかい部分も吸い上げられ、あちこちにキスマークが散らされる。

これは週明けに襟ぐりの開いた服は着られないぞ、と余計な心配が頭をよぎった。けど、生温かい舌が肌に触れ、チュツと吸い上げられるたびに、痛みにも似たかゆさが弾け、どうでもよくなる。

「……ああ……」

彼が美しい顔をしかめ、なにかを強く堪えるように声を漏らす……

その悩ましい表情が、喉奥からの声が、ひどく色っぽくて、ものすごくドキドキした。

乳房をしゃぶられながら、彼の股間にある熱いものがますます興奮し、強張っていくのがわかる。先端から、透明な液がポタリと垂れ、茜音の太腿を濡らした。

ちよ、ちよつと……。りゅうのすけさん……

身のうちに渦巻く情動を、彼が抑えているのが伝わってきて、それが震えるほどの興奮を呼び起こす。

彼の唇は一定の間隔を空け、茜音の腹筋のすじに沿ってキスマークをつけながら下りていき、お臍へその中に舌をねじ込んだ。

「ひやうっ。……りゅ、龍之介さんっ、ちょ、ちよっと……」

くすぐったさに身をよじるも、大きな手に腰骨を掴まれ、押さえ込まれてしまう。

「や、やめてっ……そこ、ダメッ……あああっ……」

必死で足をバタつかせたものの、圧倒的な体格差でむだな抵抗に終わった。

彼はからかうようにお臍へそを攻めまくり、指で叢くさむらを掻き分け、秘裂をまさぐりはじめる。

すでにGストリングは取り去られ、蜜にまみれた秘裂へそが露あらわになっていた。

さらに舌は下がっていき、まさか……という気持ちにさせられる。とつさに顎あごを下げて見ると、

彼はひざまずいた姿勢で、秘所から数センチのところに鼻先を寄せていた。

「あの。さつとやつて、パツと終わらせるだけなので、そういうの必要ないんじゃない？」

恐る恐る問いかける。

「いや、こういうのは大事なんだ。女性が快感を得るほうが妊娠率、上がるらしいから」

龍之介は掠かすれた声で説明し、茜音の両腿りょうももをぐつと押さえて開かせた。

彼がしゃべるたびに生温かい息が秘裂にかかり、かなりくすぐったい。

「けど、快感ならもう充分すぎるほど感じて……って、あつ、ちよっと、ああうっ……」

震える舌先が、秘裂の割れ目を、そーつとなぞった。

悲鳴を上げそうになり、とつさに両手で自分の口を塞ふさぐ。

彼は両手を花びらの外側に添え、さらに秘裂を大きく開かせると、花びらの付け根に舌を這わせた。そこは充分すぎるほど蜜がしたり、一度絶頂を迎えたせいでとても敏感になっている。

ぬめぬめした舌の淫靡いんぴな感触に、腰が飛び上がりそうになった。

「……っ!?」

ひりひりする花芽を舌先で攻められ、ぞわぞわっと腰が粟立あわだつ。身悶みだえする茜音を尻目に、舌は丹念に蜜を舐め取っていく……

にちゃ、ぺちゃ、というかすかな音とともに、ほんのり雌めすの香りが立ち込めた。

「なんか……すっごい、エロい匂い。股間にぐつとくる……」

つぶやいたあと彼は唇をすぼめ、ちゅう、と尖とがった花芽を吸い上げた。

うわわわっ……！ ちょ、ちよっと、さすがに無理いつ……

指で花芽をクリクリといじられ、舌が蜜口からぬるりと侵入してくる。長い舌は奥深く入ってきて、ぬめる舌と媚肉が擦れ合い、かゆいような快感に背筋せすじがおののいた。

んんんっ……。にゆるにゆるして、き、気持ちイイよっ……！ ま、また……イッチャう……

蜜が絶え間なく溢れ出し、お腹の奥のほうで飢餓感きがが膨らんでいく。媚肉で舌を締めつけながら、自然と腰がカクカク動いてしまう。

小さな花芽を押し潰され、舌で蜜を掻き出されながら、うねりは容赦ようしゃなくせり上がり、クライ

立ち読みサンプル
はここまで

マックスに達した。

「ん、んっ、んんっ、あああっ……!」

腰がびくびくつと痙攣し、稲妻が腰から脳天へ突き抜け、意識が白く弾け飛んだ。

蜜壺がふにゃふにゃと柔らかくなり、どろどろに溶けてしまう心地がした。

あああ……気持ちよすぎて、死んじゃうかも……

龍之介が膝立ちになり、怒張したものを秘裂にあてがうのがわかった。亀頭の丸い部分に、ぴたりと二枚の花びらが貼りつく。

……あ。ど、どうしよう、もうきちやう……

わかっていても、絶頂の余韻でうまく動けないし、声も出せない。

覚悟を決める暇はなかった。

彼は屈強な腰を前に突き出し、ひと息で茜音を奥深く貫く。

「?」

裂けるような痛みが股間を襲い、じわつと涙がにじんだ。

いつつたああああ……いつつ!!

ぎぎつと歯を食いしばり、息を止めてどうにか堪える。

このとき、龍之介の顔色がはっと変わったのが、ぼやけた視界の隅に映った。

◇ ◇ ◇

それから、一時間後。

菱橋龍之介はベッドの上であぐらをかき、独り困惑していた。

ぐしゃぐしゃになった伸びかけの前髪が視界を塞ぎ、邪魔くさくて掻き上げる。

……どういことだ?

すぐそこで茜音は、裸体にブランケットを巻きつけ、ぐーすか寝入っている。のんきな寝顔を見ていると、苦々しい気持ちが入み上げた。

いい気なもんだ。こっちは混乱しているっていうのに……

確認のため、そーつとブランケットをめくり、よいしょと茜音の体をどかした。彼女の眠りはどこまでも深いらしく、起きる気配はない。

まったく、能天気な女だ。こういう奴は、草原だろうが紛争地域だろうがどこでも眠れて体力を回復でき、メンタルがめちゃくちゃタフで、戦争になれば一騎当千の兵になるタイプなんだ。絶対メガネを掛け直し、顎先をシーツにつけ、もう一度それをつぶさに眺めた。

……間違いない。真っ白なシーツに散ったそれは、鮮血の染みだった。

どういことだよ? まさか……?

いやいや待てよ、と思ひ直す。血が出るパターンなんていくつもあるじゃないか。たとえば急に生理がきたとか、どこか怪我していたとか、俺が興奮しすぎて行為が激しくなるとどこから出血したとか……